INTERVIEW

サウジアラビアの石油精製・石油化学統合プラントの拡張事業を支援

フェーズⅠに続きプロジェクトファイナンスを供与

産業ファイナンス部門 産業投資・貿易部　第２ユニット
植松 義裕 調査役、小林 祐馬 副調査役、
前川 拓美 副調査役（いずれも当時）に聞く

国際協力銀行（JBIC）は、2015年3月、サウジアラビア王国法人Rabigh Refining & Petrochemical Company（ペトロ・ラービグ社）と、ラービグ石油精製・石油化学統合プラント拡張事業（ラービグフェーズⅡプロジェクト）を対象に、19億9,800万米ドル（JBIC分）限度のプロジェクトファイナンス（PF）による貸付契約を結びました。（協調融資総額は51億6,800万米ドル）

本融資は、ペトロ・ラービグ社が、既存の石油精製・石油化学統合プラントを拡張し、より付加価値の高い石油化学製品の製造・販売事業を支援するものです。

＊本融資は、「海外展開支援融資ファシリティ」の一環です。

植松 調査役

小林 副調査役

前川 副調査役

ラービグ石油精製・石油化学統合プラント拡張事業（フェーズⅡ）へのPF供与

2015年3月、JBICは、サウジアラビア王国法人ペトロ・ラービグ社と、同国西岸のラービグ地区における石油精製・石油化学統合プラント拡張事業（ラービグフェーズⅡプロジェクト）を対象に、19億9,800万米ドル（JBIC分）を限度とするPFによる貸付契約を締結しました。本融資は、（株）三井住友銀行、（株）三菱東京UFJ銀行、（株）みずほ銀行、三井住友信託銀行（株）、農林中央金庫を含む民間金融機関およびサウジアラビアの公的機関Public Investment Fund（PIF）との協調融資です。（協調融資総額は51億6,800万米ドル）

本プロジェクトは、住友化学（株）とサウジアラビア法人サウジアラムコが主要株主として出資するペトロ・ラービグ社が、既存の石油精製・石油化学統合プラント（フェーズⅠ）を拡張して付加価値の高い石油化学製品を製造し、住友化学とサウジアラムコが製品を引き取り、販売を行う計画。

なお、JBICは、フェーズⅠに対しても、2006年3月にペトロ・ラービグ社に対して25億米ドル限度のPFによる貸付契約に調印しています。

世界最大級の石化プラントをさらに増強

ラービグ石油精製・石油化学統合プラントは、住友化学（株）とサウジアラビア法人Saudi Arabian Oil Company（サウジアラムコ）が主要株主として出資するペトロ・ラービグ社が、サウジアラビア西岸のラービグ地区に整備・建設した世界最大級のプラントです。JBICは、2006年にペトロ・ラービグ社に対して25億米ドル限度（JBIC分）のPF供与を行っており、2010年5月に稼働しました。（フェーズⅠプロジェクト）

「サウジアラビアは、日本にとって原油輸入の約30%を占める最大の原油供給国です。日本政府は、サウジアラビアをはじめ資源供給国との関係強化を図るため、資源取引にとどまらない包括的かつ互恵的な二国間関係を発展させていく外交政策を推進しています。また、サウジアラビアは石油依存型経済からの脱却と国内雇用の確保のために、外資誘致などによる石油化学産業の拡大を国策としています。ラービグプロジェクトは、まさに、日本・サウジ両国の重層的関係強化につながる先駆的かつ象徴的なプロジェクトでした」と、植松調査役は背景を説明します。

「今回のフェーズⅡは、同プラントを拡張したうえで、より付加価値の高い石油化学製品を生産することを目的としています。拡張計画は当初より想定されていましたが、フェーズⅠが完工を達成した2012年春に具体的に公表され、JBICにもフェーズⅡへの具体的なPF組成の依頼がありました。両国の関係強化と日本企業支援につながるプロジェクトなので積極的に協力することにしましたが、難しい課題が数多くありました」と植松調査役。

「フェーズⅠに対しては、JBICにとって石化プラントとして最大規模のPF供与（25億ドル）を行っています。まだ完済していないこのフェーズⅠに加え、フェーズⅡ向けとして追加でPFを供与することになるため、フェーズⅠ・Ⅱを含めた適切なセキュリティ・パッケージを構築することが最大の課題でした。電力関連ではこのような実例はありますが、より事業環境が変わりやすい石化プラントでは初のケースでした。フェーズⅠは初期トラブルも含め安定操業に向けて多くの課題を残しており、フェーズⅠ・Ⅱの系統連携、原料の長期安定確保、製品の販売見通しなども大きな検討事項でした」と、基本条件の枠組みづくりにあたった植松調査役・小林副調査役は振り返ります。

植松調査役・小林副調査役は、技術コンサルタント等の専門家の意見も参考にしつつ事業計画書を丹念に読み込み、出資者や銀行団などとの交渉を進めるとともに、サウジアラビアに出張し、ペトロ・ラービグ社や出資者のサウジアラムコに対して直接ヒアリングを行うなど、「厚いセキュリティ・パッケージ」の形成に取り組みました。

日本・サウジ友好、国家プロジェクトへの貢献を目的に

基本条件の枠組みを詳細な契約としてまとめる段階で、小林副調査役に代わって本プロジェクトに参画したのが、前川副調査役です。

「一番の課題は操業体制の維持・確認でした。フェーズⅠ・Ⅱの連携により、中間製品のインターフェースも含めた複雑なオペレーションが行われるところ、あらゆる問題の発生を想定した対策とその進捗に係る出資者のコミットメントを確認しつつ、契約書の詳細な詰めを行いました。また、2008年のリーマンショック後に軟化していた石油化学製品のマーケット見通し、製品の販売体制など多岐に亘る検討事項を着実に消化し、契約に反映させました」

こうした厳しい交渉を経て、2015年3月に、フェーズⅡへのPF融資契約締結に至りました。

「私にとって、これが初のPF案件でしたが、サウジアラビアの国家プロジェクトに位置付けられる巨大案件の担当をすることに大きな責任を感じました。実際に、厳しい交渉の連続でしたが、本件を無事完遂できたことは大きな喜びです」と前川副調査役。

小林副調査役も「サウジアラビアが期待し、日本企業が参画する巨大プロジェクトの中核的なプラントとなるフェーズⅡのPF形成における基本枠組みの形成という大事な側面に関わることができたのは大きな経験になりました」と語っています。

大型化するプロジェクトに実績を活かす

近年は、プロジェクトの大型化に伴い、100億ドル規模の超大型PF案件が増加しています。本件は、金額規模が大きいという点だけでなく、中東という地域特有の地政学リスクもあり、公的機関の役割が非常に重要な案件でした。既存のPF案件をベースに、さらに新規のPFが供与されるという融資形態も珍しく、ストラクチャーも複雑で、石化というセクターも難しい、難易度の高いPF組成でした。

「また、サウジアラビアの産業多角化・雇用拡大につながり、日本企業にとってもコスト競争力とスケールメリットを活かした収益性の高い事業が期待できます。サウジアラビアでは他にも巨大国家プロジェクトを計画しており、そうしたプロジェクトに日本企業が参画していくために、本件を通じて得た経験・実績を活かして支援していきたいと考えています」と、植松調査役は今後について語っています。